

研究結果報告書

帝国日本と植民地の日本人－在朝日本人社会の再照明－

所属： 檀国大学校 日本研究所
役職： 特別研究員
氏名： 李圭洙

今回の共同研究では、在朝日本人の存在構造を通して、〈植民地近代〉の概念化を図り、植民地朝鮮で展開された近代への変化様相を朝鮮に居住した在朝日本人を介して検討しようとした。また、既存の支配と収奪あるいは支配と開発という両極端な枠組みを超えて、〈国家-社会-個人〉という普遍的な枠組みを活用しながら、植民地期に形成された植民地近代の普遍と特殊の側面を考察しようとした。具体的には、植民地時代の普遍的な分析枠組みである〈朝鮮総督府-在朝日本人-朝鮮人〉という構造を超えた朝鮮総督府と植民地政策に対する在朝日本人の認識、朝鮮総督府と在朝日本人の中核集団との利害関係などに注目した。

これらの問題意識の上で、共同研究チームは、まず〈在朝日本人研究会〉という研究会を六回開き、関連研究および在朝日本人が戦後に残した〈不二〉や〈筏橋〉などの手記を検討しながら、かれらの日本への帰還過程や意識状態を確認した。また、仁川、群山、麗水、木浦などの開港地に対する現地踏査を行い、鉄道、銀行、会社、精米所などの関連遺跡の存在状態を調査した。群山や木浦の場合は、地方行政団体が新たに港公園として当時の建物を活用していたことを確認した。さらに、共同研究チームは、大学院生を活用して今後の研究のために〈京城日報〉など関連資料の整理を行った。こうした作業は、在朝日本人研究に必要な基本資料を提供できるという側面で大きく貢献するものとして考えられる。研究成果としては、議論の結果、全羅南道の南海岸に隣接した宝城地域を中心に在朝日本人がその中心地域である筏橋に建てた植民地社会の構造的な特徴を明らかにしようとした。分析の結果、次のような事実を確認した。宝城は南海に直結されている地理的特性を有しており、内陸部の肥沃な農耕地は小作制農場経営と米穀流出を通じた収益の創出が期待できる「機会の土地」として注目された。宝城地域の在朝日本人は、開港以来、当地の植民地機関の官吏になったり、経済、教育、宗教方面で活動した。1897年木浦の開港と1914年の湖南線の開通以来、宝城地域の日本人の人口は急増し、彼らは様々な社会組織を作りながら、植民地基地を創出していった。また、一部の日本人は、新聞社や雑誌社を経営するなど、植民地支配の尖兵の役割を実行していた。特に、朝鮮の安い地価と小作制農場経営を通じた高率の土地収益率は、商業資本家と地主層の朝鮮進出を加速させた。彼らは「資本家の使命」を掲げ、朝鮮の実質的な支配者であることを唱えた。日本の植民地支配体制は、商業資本家の進出により、その物的土台が完成したといえる。また、1945年以後、彼らが残した記録は、〈筏橋〉という文集にまとめられた。この手記には、帰国の緊迫した状況とルート、そして植民地をめぐる記憶がよく描写された。これらの研究成果は、全南大学日本文化研究センターのシンポジウムで一般に公表された。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

李圭洙、寶城地域における在朝日本人社会と〈草の根〉の侵略、全南大学校日本文化研究センター、2013年9月6日

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

李圭洙、寶城地域における在朝日本人社會と<草の根>の侵略、日本学28、2014年12月(予定)

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)

李圭洙、韓国と日本 相互認識の変容と記憶、語文学社、2014年6月。